

第三者意見

株式会社ニッセイ基礎研究所

上席研究員 川村 雅彦 氏

Profile

1976年九州大学大学院工学研究科修士課程修了、三井海洋開発(株)を経て、1988年(株)ニッセイ基礎研究所入社。現在、保険研究部門。環境経営、CSR、環境ビジネスを中心に調査研究に従事。環境経営学会(副会長)などに所属。

著書は「環境経営入門」「SRIと新しい企業・金融」「カーボン・ディスクロージャー」(いずれも共著)、「岐路に立つ日本のCSR」(単著近刊)など。



CSRの報告について：グローバルCSR経営への意欲が感じられる構成

今年の冊子報告書(ダイジェスト版)には、2016年の日本化薬グループ創立100周年に向けて、グローバルの観点からのグループCSR経営への意欲が感じられる。冒頭の社長のトップメッセージだけでなく、世界の連結会社8社のトップコミットメントも記載された。ただ、あえて厳しく言えば、現状ではグローバルなベクトル合わせの段階であり、今後は各国の社会問題を反映したCSR課題に踏み込むことを期待したい。

「中期CSRアクションプラン(2013~2015年度)」が報告の中核に位置づけられ、CSR活動の4領域(基盤、経済、社会、環境)に対応させた24項目は具体的でわかりやすい。項目ごとの「昨年度の成果」と「来年度の目標」では、定量的パフォーマンスの記載もあり評価できる。しかし、内容的には国内中心的印象が強く、次期アクションプランではグローバルな拡がりを図るべきであろう。

なお、従来から提案しているKPI(Key Performance Indicators)の導入については、内部的にはすでに検討されているようであるが、ぜひとも社内外に公表されることを検討いただきたい。創立100周年に向けたCSR経営のひとつの到達点である。

CSRの内容について：グローバルCSR経営のさらなる深化を

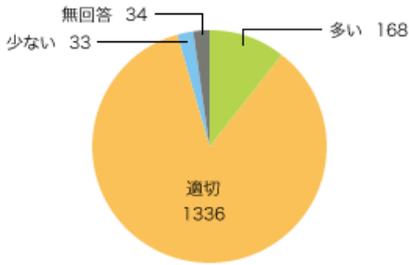
ウェブサイトにはISO26000(CSRの国際規格)とアクションプラン24項目との対照表があり、中核主題(大項目)と課題(中項目)を基準として整理されている。これで世界標準との差異が理解できるが、対応していない「空欄」が何を意味するのか説明が必要である。そこで、「関連する行動と期待」(小項目)も踏まえて、24項目の過不足や妥当性の再検討をお勧めする。

日本化薬グループの「基盤となるCSR活動」としてコンプライアンスがある。これはCSRの基礎の基礎であることに議論の余地はないが、海外ではリスク要因になることもある。つまり、人権・雇用・労働などに関して、法令はあっても規制が不十分、あるいは法令そのものがないこともある。その場合には、国際行動規範などのソフトローに基づき判断することになる。これと関連して、「CSR調達基準」の策定準備中とのことだが、すばらしい取り組みゆえ早期の完成を願う。

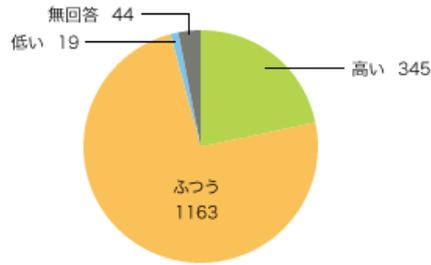
日本化薬グループは連結25社をかかえ、世界9カ国で事業展開するグローバル企業である。昨年は「CSR経営の第二期の始まり」と書いたが、取り組みは確実に進んでいる。「自社のビジネスが環境や社会に及ぼす影響への責任」というCSRの本来の定義を銘記しつつ、さらなる拡充に期待したい。

Q. 本レポートの印象はいかがでしたか？

● 情報量



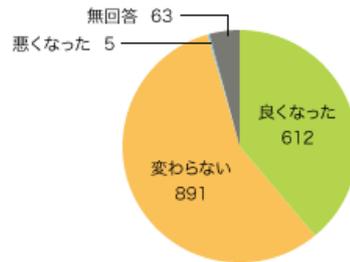
● 情報の質



● わかりやすさ

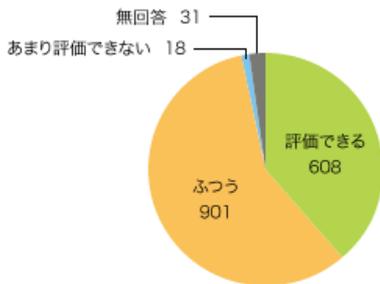


● 日本化薬グループのイメージ



Q. 日本化薬グループのCSR活動の評価をお聞かせください

● 評価

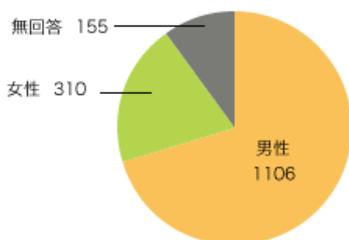


● 本レポートで関心を持たれた項目（上位10項目）

1位	豊かな生活を目指した日本化薬グループの現在の製品および未来の技術や製品
2位	日本化薬グループの事業
3位	社会への取り組み
4位	従業員への取り組み
5位	お客様への取り組み
6位	CSR経営の考え方
7位	トップメッセージ
8位	中期CSRアクションプラン
9位	特集 明日につなげる運動発表大会
10位	環境安全衛生品質マネジメント

Q. ご回答いただいた皆さまについて

● 性別



● 年齢

